

FD NEWSLETTER



CONTENTS

- F D 活動の新展開を期待
駒澤大学教務部長 清水 卓
- 2007 年度「学生による授業アンケート」(前期)実施報告
- 前期授業アンケートの結果について
経済学部 齊藤 正
グローバル・メディア・スタディー
ズ学部 吉田 尚史
総合教育研究部 鈴木 淳平
- 授業アンケートに関する座談会
- F D 推進委員会の今後の活動予定

授業アンケート(後期)実施

11月7日(水)～

11月13日(火)

F D 活動の新展開を期待

教務部長 清水 卓

本学で F D 活動が始まって早くも 3 年半を経過した。年 2 回の学生による授業アンケートも定着し、大学の日常的風景となった。しかし、いったん制度が定着すると、運用が機械的になり、F D 本来の目的を追求する意識が希薄となりかねない。そういった危惧から、今一度 F D の意義について確認し、今後、本学の F D が目指すべき方向について、教育・研究のサポート役を担う教務部の現状を踏まえて考えてみたい。

F D は教員の授業改善を進める取り組みであるとされる。大学が高等教育の場であり、学生に対し学問の最新の成果とその奥義を教授する場であるとすれば、その教育活動の質を高めることは大学のもっとも基本的な社会的責任であるといえる。そして、教育の現場が様々な形態の授業である以上、授業の質を客観的に把握・評価し、それに基づき自ら改善を図ることが必要である。「学生による授業アンケート」は、授業の実態を把握するための不可欠な手段であるといえよう。さらに、F D の究極的目的である授業の質的向上を目指し、授業評価を端緒として、授業公開の取り組みが進んでいる。この活動は一層広げ充実させたい。次の飛躍は、評価結果の公開であろうが、その実施のためには相当慎重な議論が必要であろう。

ところで、個々の教員の教育技術の他にも授業の質を左右する要素は多数ある。教務部の日常では、無断休講、成績評価の変更、成績評価を巡る応対、授業中の不適当な発言や暴言、科目名から乖離した授業内容等々に対する学生の苦情が少なくない。こうしたことは狭い意味での授業技術の改善以前の基本的問題であると思われる。これらのトラブルの解消もまた F D の課題ではないだろうか。そのためには、すでに多くの大学で制度化が進んでいる新任教員研修を中心とした教員研修の制度化、人数の上では専任教員より多い非常勤教員の F D の取り組み、授業科目内容と科目編成、履修方法、成績評価制度の見直しといったカリキュラム改善が不可欠であろう。

個々の授業の質的改善のためには授業アンケートは不可欠である。同時に、教育機関としてトータルな授業改善を図るためには、以上のような課題を含めた新たな F D 活動の展開が必要であろう。

2007 年度「学生による授業アンケート」(前期) 実施報告

前期終了科目を対象に実施した前期の授業アンケートの実施科目は以下のとおりである。昨年度の回答率は、69.4%、本年度は70%で、僅かであるが上昇している。

今回は、基本的に前年度の質問項目を踏襲することにしたが、学生の授業の取り組みについて、これまで「この授業の出席率はどうですか。」という質問を講義科目、実験・実習科目、語学科目について「この授業の予習・復習にあてた時間は、1週間に何時間くらいですか。」という質問に変更した。保健体育実技科目については、当初の質問を削除することに留めたが、後期実施分については、他の科目と同様に追加することになっている。

なお、後期実施分については、授業担当者が個別に任意の質問項目を定め、アンケートを取るようになっている。自由質問は1つであるが、ぜひご利用いただきたい。

実施期間 平成 19 年 6 月 18 日(月)～23 日(土)

対象科目数：171 科目

対象学生数：11,404 名

実施科目数：165 科目

専任教員：99 科目

非常勤教員：66 科目

講義科目：101 科目

実験・実習科目：12 科目

語学科目：29 科目

保健体育実技科目：23 科目

回答者数：7,992 名

アンケート回答結果 7 月 5 日(木) 発送

前期授業アンケートの結果について 授業評価アンケートの受け止め方

経済学部教授 齊藤 正

私の F D との出会いは 1996 年 6 月に豊橋で開催された私立大学連盟の研修会「大学の教育・授業を考えるワークショ

ップ」であった。手元にある報告書を見ると、全体のテーマが「授業改善のための諸方策」となっており、F D の理念と方法から、授業評価、カリキュラム開発や教授法、教育機器の活用に至る広汎な問題が分科会方式で検討され、私は「F D の理念と方法」という分科会に参加した。

F D の一環としての学生による授業評価は、それが授業の改善に活かされることが期待されているし、この『F D NEWSLETTER』でも F D 推進委員会の委員の方々を中心とするさまざまな積極的経験・意義付けが紹介されている。まことに敬服の一語である。しかし、私立大学連盟のワークショップに参加して以来 10 年あまりが経過し、学部独自で実施していた時期も含めると、7～8 回に及ぶ経験のなかで、「大学の授業はどうあるべきか」という「悩み」が年々大きくなっていることを告白せざるをえない。以下では、学生諸君から私の授業に寄せられた主な意見を紹介しながら私の「悩み」を記してみたい。

私の授業に対しては、「毎回レジュメを配布し、詳しく説明してくれるので良い」、「熱意が伝わる授業である」という肯定的評価とともに、「改善してほしいこと」として「板書がきたないこと」、「授業が難しいこと」が多い。

中でも一番多く寄せられる「板書がきたない」という指摘には毎度反省しきりであるが、同時に板書をきれいに書くことが「改善してほしいこと」の一番にあげられる大学の授業とは何なのだろうかという思いが年々大きくなっている。

私の専門講義科目は「銀行システム論」(前期)と「現代銀行事情」(後期)であるが、経済学および商学の一分野としての銀行論の講義を通して社会を見る眼、生きる力を育てること、言い換えると、社会人として自立することの一助となるということを講義の目標においている。このことは、履修する学生が銀行や金融に多少とも関心をもっていること、および、将来金融関係の仕事に就く希望を持っていることを排除するものではないが、プロの銀行マンを養成することを直接的な目的とするものではないということである。大学教育とはリベラルアーツであり、職業教育ではないと考えているからである。プロの銀行マンを養成するためには、おそらくビジネススクールのような大学院の課程での学修が必要であり、学修時間もはるかに多く必要であろう。

したがって、学部における講義を通じて銀行に関連する問

題をすべて網羅することは、どんなにレジュメや資料で補ったとしても不可能であり、ライブの講義ではエッセンスを取り出しながら強弱をつけたり、私見を加えたり、また、時には社会ネタのトピックを交えたりしながら進行することになる。こうした「行間」はその場で気づいたことや朝のニュースで拾った話題なども多く、話の勢いからしばしば黒板に「なぐり書き」となることは否めないが、そこにこそ放送大学のような授業とは違うライブの講義の良さがあがり、こちらとしては、整序された説明はレジュメで十分ではないか、レジュメや整序された板書には示されない「行間」こそメモをとるなどして「汲み取ってほしい」と思いながら講義しているが、学生諸君はそれら「行間」もすべて書き写さなければ、不安なようである。こうした、授業のあり方について、私と学生諸君の「期待」のギャップが拡大してきているところに「悩み」の原因の一つがあるように思われてならない。授業の第一回目から「試験はどんな問題が出るのですか？」という質問が寄せられたり、「レジュメと同じことを板書でも書いて欲しい」などという注文明「期待ギャップ」の表れの一つであるように思われる。

以上、学生諸君の評価に対してやや開き直ったコメントを記したが、以下のような対応を試みて「期待ギャップ」を少しでも埋めようとしているということを最後に申し添えておきたい。

私なりの対応とは、過去数年来、授業終了時に毎回ミニレポートとして「疑問に思ったこと」を提出して貰っていることである。単なる「感想」ではないところがミソであり、提出者には出席点を与え、優れたものにはさらに加点評価を与えたとともに、次回の授業で紹介している。このための負担は決して小さなものではなく、何度も挫折しそうになったが、学生諸君の理解度や授業の進行速度を確認する上でも役立っているし、学生諸君にとっても刺激になっているようである。「悩み」ながら到達した現時点でのささやかな「双方向」授業の試みである。

(追記) なお、二番目に多い「授業が難しい」という評価への対応も「悩み」のタネであるが、字数が尽きたので、別の機会に譲りたい。

授業アンケートを終えて

グローバル・メディア・スタディーズ学部講師

吉田 尚史

本稿では、大学における授業評価について、駒澤大学の状況を踏まえて議論し、全授業を対象とした授業評価(授業アンケート)とその有効利用の可能性について模索する。

現在、文部科学省の関係機関大学基準協会は、大学の全授業の授業評価を実施して学生へ公開すべきという目安を掲げている。これに応じて多くの大学において、授業を学生がアンケート形式で評価を行う、いわゆる授業評価が行われている。

授業評価の基本的な論点は次の3点であると考えられる。

(1)目的:ある科目の年度間の比較・評価、同名の科目間の比較、同分野の科目間の比較、教員個人の授業改善、人事評価など。

(2)結果の参照:(学生からの授業評価の結果を見ることが出来るのは誰か)担当教員のみ公開、同じ科目を持つ教員のみ公開、同じ分野の教員のみ公開、学部の全教員のみ公開、全教員へ公開、学内の全教職員・全学生へ公開、全公開、など。

(3)結果の利用:授業改善のみ、非常勤教員の次年度採用に利用、専任教員の人事的な評価に利用、など。

これらを曖昧なまま授業評価を行っても実質的な意味を見出すことは難しい。

歴史的な背景・経緯や、学問分野による差異もあろうが、まずは科目の年度間の比較を目的として、全授業について授業評価を行ってはどうか。科目間の比較が意味ある場合には順次それらを加えればよい。結果の参照範囲も、現在のように担当教員のみから、順次拡大すればよい。結果を人事評価に使うかどうかは、学部・学科・分野によって議論が必要であろう。

ただ、授業評価は、学生視点の評価であるために、当然、限界も存在すると考えられる。そもそも教員が教育を与えているのが授業であり、学生がそれを客観的に良し悪しを正確に判断することは難しい。極論すれば、単位の取得可能性が高い授業が良い授業と判断されることになる。

唯一、学生視点の授業評価において教員側に有効な情報は、

授業における不明点であろう。つまり「どこが分かりにくかったか」という情報を集約して教員が改善を図れば、授業評価は有効である。難しい教育内容を難しく教えるのではなく、難しい内容に興味を持たせて理解させ応用させることができれば、授業評価としては意義深いことではないだろうか。

具体的な経験を紹介させて頂ければ、2007 年度前期に、私は「インターネットとメディア」という授業において授業評価を行った。インターネットの原理・要素技術・それらの応用・PC を用いた実習などを含む授業だが、多くの技術的トピックを紹介したこともあり「難しい」という意見が多かった。難しいというコメントは各学生から個別に聞いていたが、どの部分がどのように難しいかまでは不明確であった。しかし今回、授業評価において、用いている用語が難しい、というコメントをしている学生が多く、改善の可能性が明らかになった。次期以降の授業で、毎回の授業資料に用語解説やその文脈での用語の意味を付与することによって、改善を図ることが考えられる。

以上、駒澤大学の発展のために、厳しく言い換えれば駒澤大学の生き残りのために、教育において授業評価が有効に機能する局面は存在すると考えられる。よって、現在の全学的な授業評価を、拡大・電子化・シラバスとの統合などと含めて、戦略的に推進すべきではないだろうか。

また、そもそも、F D (Faculty Development) は、授業評価や授業アンケートのみならず、教育の改善のための活動の総称である。授業評価だけにとらわれない駒澤大学独自の大局的な教育の戦略が必要であろう。

さらに言えば、最先端の研究をしていなければ、よい教育はできない。各教員が研究を深め、それを授業に随時取り入れることにより、さらなる教育の質の向上が期待できる。その意味で、外部資金の積極的導入・産官学連携などを含めた、駒澤大学としての研究体制の戦略も必要であると考えられる。

「体育実技」の目的と存在意義

総合教育研究部スポーツ・健康科学部門講師

鈴木 淳平

体育実技科目の教材は「スポーツ」です。学生は休息をと

りつつ、時間いっぱい運動します。スポーツの原点は身体運動を楽しむことなので、とにかく動くことと楽しむことが第一の目的になります。実際には、体力・体格・経験の差や、年齢差、性差が表れ、ともすれば楽しさを減じてしまう場合もあります。しかし、そのような違いの中で「楽しさを生む工夫」は、身体運動の理解を効果的に助長させます。

第二の目的は、自主的な運動参加の啓発です。大学での体育実技は、「生涯スポーツ」の入口となり、学校教育での「体育」の出口となります。卒業後の人生での運動参加は、自主的かつ自発的な行為になるので、スポーツへの興味と運動意欲を促進させる最後のチャンスだと考えています。

科目によっては2～3週単位で種目変更しながら、各種目特有の技術や知識に触れていきます。多種のスポーツを体験する機会は、運動への興味を促進させますし、その運動経験が将来役に立つ場合もあります。また、適度な運動の実践は、あらゆる意味で健康維持増進に有効かつ重要な手段の一つです。そのような健康への意識も高められたら良いと考えています。

第三の目的は、社会人教育です。少し大袈裟な言い方ですが、「体育」だからこそできることだと思います。具体的には、「休まない・遅刻しない」「挨拶をする」「積極的に取り組む」の3つです。どこでも求められる当たり前のことです。交通機関の遅れの影響や、気候条件の変化(暑い・寒い)でやる気を持ちづらい時期もあつたりして、困難なこともあります。言い訳できない場合があります。限られた時間の中ですが、学生のうちに習慣化させ、きちんと身につけさせるべきだと考えています。

体育実技では出席と運動参加が評価の大前提です。欠席・遅刻は成績評価に直接影響するので学生は注意しますし、単位を落とすほど休む学生はごく少数です。欠席・遅刻をせず積極性もある学生は全体の1割程度で、大多数が何らかの理由で欠席・遅刻し、「まだ単位は出せるか」「あと何回休めるのか」ということを尋ねてきます。そのつど、「本来、授業は休んではいけない」「何回休めるのかも、単位を出せるかどうかとも答えられない」と答えます。当然それは考え方の話です。たいていの学生はそこで「出席すること＝努力すること」「時間を守る＝約束を守ること」と説明をすれば理解してくれます。学生の認識が「ちゃんと出ないと、この先

生は単位を出してくれない」でも良いので、次第に「頑張っ
て良い評価を取ろう」と考えるようになってほしいです。

挨拶は学生同士でも、教員に対しても最初はできません。
おそらく知らない者同士だからであり、習慣として身につい
ていないからでしょう。しかし、挨拶とは本来、知らない者
同士が打ち解けるために欠かせない最初の一步です。要は何
かきっかけがあればいいのです。授業で半ば強制的に挨拶さ
せられているうちに、仲間と自然に挨拶を交わし、徐々にそ
の心地よさや大切さを理解していく。社会に出たときに役立
てば、それだけで意義があります。きちんとした挨拶はどこ
へ行っても良い評価をされ、挨拶はできなくても能力が高け
れば良いなどということは聞いたことがありません。

積極性を養うという点が最も難しいです。学生の行動の中
に「やりきらない」「楽しもうとしない」という消極性が実
際に存在します。最近の学生は、力を出し切らずにそれなり
にやってのけることを「普通に」カッコいいと賞賛し、その
反対に、やる気になって少し目立つことを「しゃしゃってい
る」と冷笑しています。「一所懸命やる」姿は恥ずかしいと
いう考えが多数派ではないかと感じます。同時に全体に共通
して、集団の消極的な「空気」には流される傾向がみられま
す。この年代においてはどの時代でも同じかもしれませんが、
その傾向は年々強くなっています。本当は思い切り楽しみた
いのに、集団に漂う「空気」に流されてセーブするのは悲し
いことです。こういう学生たちをどうにかして目覚めさせたい。
「たかが体育だから」という意識を変えていかないと「ス
ポーツ」の未来は暗いのではないのでしょうか。

私なりに「体育」を次のように定義しています。『スポー
ツが教材となり、その学習によって、人格形成と体力養成を
ねらう教科』です。「少年を大人にし、大人を紳士にする」
とはゴルフの格言ですが、まさに心身両面において成長と自
立を実現できるもの、それが「スポーツ」であると考えてい
ます。そして、「体育」の授業を通じて、あるいは何らかの
契機となって、大人に成長して卒業してほしいと思っていま
す。

F D NEWSLETTER 寄稿にあたり、このような機会を与えてく
ださったことに感謝申し上げます。また、日頃ご協力いただ
いている教職員の皆様にこの場をお借りしてお礼申し上げ
ます。

授業アンケートに関する座談会

本学でもすっかりおなじみとなった「学生による授業アン
ケート」。自分の授業に対し、受講生はどんな評価をしてい
るのか、また、どんな感想や意見を持っているのか。例年 12
月(前期終了科目は7月)には、その結果が自宅に郵送され、
不安と期待の入り混じった気持ちで開封する……。授業ア
ンケートとそのフィードバックは、教員の授業サイクルの中
で、欠かせない行事となっています。

授業アンケートの方法・内容・結果に関する一人一人の思
いを教員個人のレベルにとどめず、体験交流の場をもつこと
は、FDをさらに発展させていく上でも重要です。

今回、初めての取り組みとして、授業アンケートに関する
座談会を企画し、各委員の呼びかけを通じて集まって下さ
った先生方と約1時間にわたって話し合いを行ないました。予
想以上にさまざまな意見や提案が出され、今後のFDを考え
る上で大いに参考になるものでした。以下、できるだけ忠
実に座談会を紙上で再現してみました。ご意見などがありま
したら、ぜひFD推進委員会委員までお寄せ下さい。

日 時：平成 19 年年 9 月 12 日(水) 13:00~14:15

司 会：長尾謙治(FD推進委員会小委員会副委員長、文学
部准教授)

出席者：

安元 稔(FD推進委員会小委員会委員長、経済学部教授)

苗村憲司(FD推進委員会小委員会委員、GMS学部教授)

中川淳平(経営学部准教授)

奥山康男(医療健康科学部講師)

上野勝広(総合教育研究部教授)

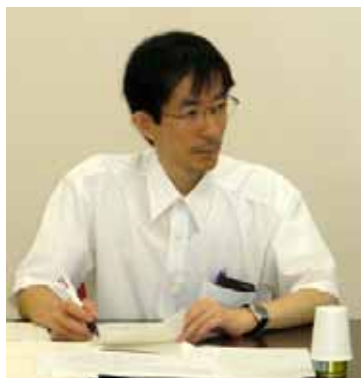
塩旗伸一郎(総合教育研究部准教授)



長尾 本学では、2004 年度に、F Dの一環として学生による授業アンケートがスタートしました。今年で 4 年目になるわけですが、授業評価はかなり定着してきていると思います。

ただ、教員一人ひとりが実際にどんな感想を持ち、また今後のあり方についてどう考えているのかについて、全体の感想を聞く機会はこれまであまりなかったように思います。

そこで今回は、座談会という形で、ざっくばらんにいろいろな意見を言ってもらい、今後の授業アンケート改善について考えていくきっかけにしたいと思います。



まずはじめに、これまで評価を受けてこられた感想からお伺いしたいのですが。

塩旗 アンケート調査が開始された当初は、とても新鮮で、強いインパクトがありました。

ただ、何のための授業アンケートなのかという目的意識がいまだに明確になっていない点が気になります。そのせ



いか、最近では単なる「通年行事」となってしまう、少しマンネリ化している気がします。

奥山 私は別の機関から本学に移ってきて 3 年目になります。本学の授業アンケートは、自身の対象科目の結果だけが自宅に郵送されてきますが、やりとりが双方向的ではなく単方向的な感じがしています。「結果はこうだからこうなさい」式の解答を求めているわけではないのですが、今のやり方では、自分がどの位置にあるのかが把握できない。アンケート結果だけでは、学生が授業のどこに満足していて、どこに不満があるのかを考えるのは難しいと思います。結果をどう生

かすのか、次のステップが大切ではないでしょうか。他の先生方がアンケート結果をどのように活用されているのか、聞いてみたいです。

中川 私は例年、同じ講義でアンケートを行っていますが、受講者が多いので、これまで数回の結果を振り返り、一定の傾向がつかめています。5 段階評価で数値化された部分は正直言ってあまり真剣には見ていませんが、自由記述欄に書かれた学生の声は、気をつけて見えています。自分の口調などの個人的な癖や、終了時間が近づくとスピードが上がって聞き取りづらいというような指摘は、大変参考になります。

安元 授業アンケートも、今後に向けて、そろそろ総括が必要な時期に来ているのではないかと思います。各教員が実施方法や内容についてどう感じているのか、また結果をどう受け止めて授業改善にフィードバックしているのかなど、教員自身にアンケートを行う機会を作るのも良いでしょう。小委員会でも検討していきたいと思います。

上野 中川先生のおっしゃる通り、自由記述の部分は鋭い意見や感想が多く、参考になっています。アンケートへの回答に積極的ではない学生も多い中で、真面目に書いてくれた意見からは、ポジティブな意味で発見させられることが多い。

結果については、その後の授業で「こういう声があった」と発表していますし、直せるものは直す、実現が難しいものは努力するなど、私自身の受け止め方も学生にフィードバックしています。

苗村 私は昨年、この大学に来ましたが、昨年の結果では、平均点が 3 点を割った項目があり、自由記述部分の回答をみると「内容が難しい」「進み方が早い」などの意見が書かれていました。パソコンの実技科目が対象だったのですが、予習・復習をきちんとしていけば十分についてこられる内容です。しかし学生のほうは、そうした自己学習に重点を置かず、決まった時間に座って聞いているだけで単位が取れるものと期待している。教育目標と、学生の現実の要求との間に食い違いがあるわけです。教員が、評価を上げようとして、こうした声に迎合してしまうと、大学の教育レベルはどんどん

下がることになってしまいます。

F D はもともと、アメリカからやって来たものです。アメリカでは、学生の権利意識が高く、授業料を払った以上はその分吸収しようとする。教員もそれを前提として毎回内容の濃い講義をするし、課題も出す。ところが日本では、授業料を払ったのだから、できるだけ簡単に全部の単位がほしい。それに応えてくれない大学はそもそも教え方が悪いと思ってしまう。もちろんそんな学生がすべてではありませんが…。

アメリカの高等教育事情と日本のそれとは大きく異なっており、その点を考慮せずに全国の大学でこの制度を導入してしまったために、矛盾が生じているのです。

本学における F D の現状と課題

長尾 過去 4 年間、実際に行われてきた内容を振り返って、課題としてあげられる点はどこでしょうか。

奥山 本学では、残念ながら F D のコンセプトそのものが明



確になっていません。授業アンケートがスタートして 4 年もたっているのです、こちらで短期的・中期的、さらに長期的な見直しが必要でしょう。

安元 おっしゃる通りです。駒澤大学での F D は、なぜそれが必要なのかという理念についての検討が行われないままに、他大学で実施しているからというような、いわば他律的な動機で導入されたという側面が強いですからね。

上野 私は、F D 委員会の準備委員会に参加していました。当時は、駒大は F D について他大学から 5 年も 10 年も遅れをとっているのです、とにかく大急ぎで形を整えることが大切だという論調でした。安元先生が言われたように、他律的に導入したわけです。そのため、時間的な余裕もなく、いちば

ん大事な理念が後回しにされてしまったように思います。

安元 その影響が、いろんなところに出ています。例えば、学部ごとの教育目標なり方法なりが十分に反映されていない。経済学部では、受講生が 800 人を超える授業がいくつもあります、それだけの人数がいると学生をなかなかコントロールできない。それをサポートするための T A 制度も十分でない。こういう状況では、コミュニケーションがうまく取れなくても仕方ありません。



授業ごとの特徴を考慮せずに同じ形式でアンケートを行うと、学生の受け取り方も違うし、結果も違う。この点をどう解決していくかも大きな課題です。

どこを改善していくべきか

長尾 制度自体、確かに大きな課題を抱えていますね。授業評価は教育力向上に欠かせないものですから、「走りながら考える」ことが大切かと思います。今後に向けて、具体的にどこを改善すべきなのか、お気づきの点をお聞かせ下さい。

安元 他大学の先生との間で話題になったのですが、授業アンケートは現在、匿名で行われていますよね。匿名性はもちろん大切なのですが、学生の回答は前向きなものばかりではなく、教員に対する個人的な好き嫌いや、「採点が厳しい」など、学生自身の努力が必要な項目についての恨み節も多い。回答への責任を持たせるため、記名制にすることも議論しているのではないのでしょうか。

上野 記名・無記名の問題については、それぞれメリット・デメリットがありますね。記名制にすると、回答が成績評価に結びつくのを恐れて、学生が自由に記述できない、いいことしか書かないという問題が生じます。そうなれば、アンケート調査本来の目的を阻害することにもなってしまいます。

中川 記名制で実施すると、教員を褒めるような内容の回答が多くなってしまいうでしょう。これまで体験してきた「内申書」をイメージしてしまうと思います。

安元 昔の大学では、先生は雲の上の存在というイメージが強かったですね。そのため休講回数が多くても、それが大きな問題になることはあまりなかった。

時代が変わった今では、ほとんどの教員は決められた回数や時間を守って授業を行っています。その点からすると、設問内容が時代にそぐわないものもあります。調査票には、できるだけ多くの教員の意見を取り入れていく必要があります。

塩旗 外国語部門の授業アンケートでは、語学科目専用のシートが配布されます。その中に、「視聴覚教材を効果的に取り入れていたか」というのがありますが、この項目は教員からの評判が悪いですね。視聴覚教材はあくまで補助であって、それを使えば必ずいい授業になるとは限りません。

語学科目専用シートなので、外国語部門の意見も聞くべきではないでしょうか。

安元 調査票の改善は重要ですね。今年度は、設問の1つを空欄にして、各教員がその授業で学生に聞いてみたいことを自由に設定できるようにしました。自分の聞きたい設問の結果が出るのですから、教員の関心も高まるでしょう。今回は1つだけにしましたが、もっと増やしてもいいと思います。

また、他大学では、教員がアンケート用紙に手を触れられないようにしているところもあります。評価の厳密さを考えれば、本学でも、改善していく必要があります。

苗村 調査の時期についても改善の余地がありますね。現在は11月上旬に行われていますが、時期的に中途半端です。私は、学期末に実施して、翌年度の授業に反映させるほうが合理的なのではないかと思います。

授業アンケート結果の公開について

安元 大学基準協会の本学に対する評価結果をみると、F D に関しては、概ね基準に適合していると判断されています。ただ、授業アンケートの結果が公表されておらず、その点について一層の努力が求められていますね。

苗村 私はF D に関心があるので、他大学の状況を調べているのですが、Web上で結果をすべて公表している大学がありました。その大学では、学生からの評価が5段階中ほとんど4点以上となっていました。ただ、この結果は必ずしも褒められるものではないと思います。

授業内容を易しくし、試験も簡単にすれば、学生は満足する。だから授業への評価も高まる。つまり評価の点が高すぎるのは、逆にみれば、大学が教育をサボっていることの裏返しである可能性もあるわけです。



結果を良くしようと
思って、学生
に迎合する
のは問題で
す。学生が楽
になるよう
な方向に持
っていけば、

日本の学生の満足度は間違いなく上がるでしょう。しかしそれでは、大学本来の教育の意味がありません。

奥山 公開については、慎重に考える必要がありますね。基準や方法について、しっかりと議論が必要です。特定の教員がさらし者になるような形での公開は問題です。

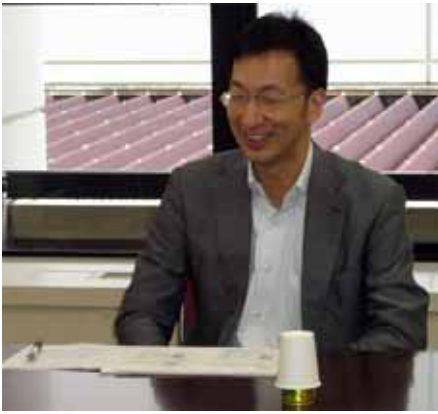
苗村 授業の評価結果の公開は、学生がその授業を履修する際の選択の基準として行うべきです。前年度の学生がどんな評価をしているのかは、その授業を受けるかどうかを決める上で重要な判断材料となります。ただ、現状ではすべての科目が対象となっていないので、無理がありますが……。その点からすれば、必修科目にアンケートを行っても、学生に選択の余地はないわけですから、あまり意味がありません。

GMS学部で議論になっているのですが、将来的には、同

じ必修科目であっても、レベルや内容によって学生がクラスを選べるようにしたいと考えています。

日本では、大学基準協会が公開の方針を打ち出していますが、公開の目的については触れていません。しかしアメリカでは、科目選択の判断基準にする目的で、評価結果が公表されています。それ以外の目的、例えば人事の判断基準として使うことなどについては日本では反対が多いようですね。

上野 公開されることを気にしすぎて、人気取りのような授業を行ったり、学生に迎合するようになってしまうのであれば、教育的には良い方向ではないですね。



駒澤大学の教育のあり方と F D

長尾 教育機関としての大学の性格上、F D は今後ますます重要になるでしょう。駒澤大学らしい教育と、F D のあり方について、ご意見をお聞かせ下さい。

奥山 現在の大学生は、今まで自分が受けてきた中学・高校のような教育を求めているようです。これまでの大学生と少し異なってきているわけですが、そういう学生が増えてきている以上、しっかりとした F D が必要です。

中川 ここ 3・4 年の授業アンケート結果でわかってきたのですが、授業には熱心に出てくるけれども、大学教育に適應できない学生が多くなる傾向にあります。そう考えると、大学に適應できない学生をどう育てるのかという点、つまり導入教育が重要になってきます。

また、F D の一環として行われている公開授業については、



大学のホームページに載せて、受験生等にアピールすることを考えてみましょう。特徴

のある研究をしている講義をピックアップするのも 1 つの方法ですね。F D の枠の中だけで考えるのではなく、それを発展させる方向性もあっていいのではないのでしょうか。

苗村 授業アンケートは、他大学でもそれぞれ苦労していますが、必ずしも成功しているとはいえないようです。

私が駒澤大学に就職して驚いたのは、F D 委員会の中心的な課題が授業アンケートになってしまっていることです。文部科学省では、授業アンケートを F D に並列して位置づけ、F D は教員の研修制度を中心にしています。

大学基準協会では、むしろ大学院の場合に F D に力点を置いています。ドクターを持っている先生が、必ずしも研究指導が上手かどうか分からない。だから学生指導に関する研修をやりなさいということなのです。

少子化によって大学の間口は広まるので、その対応として、今後は外国人をより多く受け入れる方向になるのは間違いありません。そうした動きの中で、駒澤大学はどういう教育をしていくのか、その理念を確立することがまず何よりも大切です。F D も、それに基づいて決められるべきものです。駒澤大学では、その本流がまだ抜けています。駒澤大学らしい F D のあり方について、大学全体で議論していくべきです。

安元 苗村先生のお話にもあったように、駒澤大学では F D イコール授業アンケートになっている。しかし、それ以外の部分でも、やらなければいけないことがいくつもあります。例えば e ラーニング (愛称 YeStudy) のプログラムが始まっていますが、教育効果をより高めるための検証作業も必要です。授業アンケートも含めた F D 全体の推進が大切です。

長尾 今回の短い時間の座談会だけでも、再検討すべき事項や今後に向けての具体的な提案がいくつも出されました。さらに全学的に議論を深めていけば、より多くの建設的な提案が出てくるでしょうし、交流が深まって大学全体が活気づくと思います。F D に関し、大学構成員全体で話し合える場が増えていくことを期待しています。

お忙しい中、皆様どうもありがとうございました。

F D 推進委員会の今後の活動予定

平成 19 年度第 4 回小委員会開催

平成 19 年 10 月 1 日 (月)

F D 研修会

テーマ：普段着の e-learning

日 時：平成 19 年 10 月 29 日 (月) 午後 4 時 20 分

場 所：1-405 教場 (パソコン教場)

内 容：1) Modle (Yestudy) の説明

総合情報センター 三浦 謙一氏

2) 事例報告

日野 健太 経営学部准教授

吉田 尚史 GMS 学部講師

岩崎 皇 総合教育研究部准教授

F D 活動についてご意見がありましたら、各学部等の小委員会委員までお申し出ください。

編集後記

F D NEWSLETTER 第 12 号が完成いたしました。今回も、多くの先生方に原稿をお寄せ頂き、この場を借りてお礼申し上げます。

第 12 号では、より多くの大学構成員に、F D についてさらに関心を深めて頂けるよう、授業アンケートに関する座談会を企画・実施して、誌面上で再現してみました。お忙しい

中、ご参加くださった先生方をはじめ、当該学部構成員に呼びかけを行ってくださった小委員会委員各位、また企画をサポートしてくださった事務局の方々に、改めて感謝申し上げます。

座談会の記事にも出てくるように、教員個人個人は、F D や授業アンケートに関してさまざまな意見や提案をもっていますが、これまでの 4 年間、その側面でのフィードバックが十分ではなかったように思います。4 年といえば大学に入学して卒業する期間と同じで、大学にとって 1 つの大きな区切りです。これまでの成果をもとに、今後の課題と方向性を整理・検討する機会が到来しているといえるのではないのでしょうか。

F D 推進委員会および同小委員会では、各学部等を代表する委員の先生方のご意見を基に改善すべき点を決めて実施に移しています。

今年 6 月から授業アンケートの項目の一部分を修正し、さらに 11 月のアンケートで教員が項目を追加できるようにしたことは、その一例です。今後、対象科目の追加とフィードバックの方法についても検討をする予定です。

F D は、駒澤大学の教育の質を上げていくために、なくてはならない取り組みです。そしてそれは、大学の教職員・学生すべてが協力してはじめて機能するものです。F D 推進委員会の活動に対し、これからもご理解・ご協力を賜りますよう、また、今後の改善に向けて建設的なご意見を頂きますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

(長尾謙治、苗村憲司)

【タイトル横の写真は、7 号館前】

F D NEWSLETTER Oct.2007 第 12 号

発行日：2007 年 10 月 15 日

発行者：駒澤大学 F D 推進委員会

〒154-8525 東京都世田谷区駒沢 1-23-1

03-3418-9125 Fax 03-3418-9114

(事務局：教務部)